漂白少年

東雲八夫

少年は、消しゴムで、白い軌道を描く。少年の後ろには、何もない。だから、様々なものが、なだれ込んでくる。少年は、振り返らない。

道の使い道を知ってるかい。僕は、向こうへ行きたいんだ。誰かが、道を塞いだ。少年は、それを知らない。

知らせ。知らせ。また、知らせ。鳥。一羽、舞い降りた。続けて、二羽、三羽。

教えてくれて、ありがとう。少年は、深々と頭を下げた。紙。仕方がないので、背負った荷に、放り込んだ。また、重くなる。そして、膨れる。

閑静な住宅街を抜けて、商店街へと少年は進む。少年が通った後は、やはり、白い道ができている。白く染まっているのだ。

この紙を作った人たちにとって、紙の中の世界は、過去なんだ。でも、読んでる人にとっては、今。

未来の未来の、未来にいる人。その人のいる場所へ、少年は向かっている。本当の未来を取り戻す。

背負った荷は、大人一人では持ち上げられないほどにまで、膨れ上がっていた。だが、少年は平然と歩いている。鳥が多くなってきた。荷にくちばしを突っ込んで、知らせをおいていく。

額には、うっすらと汗がにじんでいた。灰色の塔。見上げながら、少年は汗を拭った。てっぺんは見えない。

入口に荷を置いた。鳥が集る。みるみるうちに、膨れていく。

役目を終えた。少年の表情は、晴れやかだ。

最近、好きな人ができたんだ。歯を出して、笑った。

荷が、弾けた。乾いた音。白撃が少年を飲み込んだ。渦を巻いて塔を包み込む。

何も、見えない。少年は、振り返った。道。それも、見えない。さよなら。思い出したかのように、手をふった。

塔は、渦の中。不意に、その渦が消えた。拡がる。塔も、消えた。紙切れが、舞った。一枚。少年の手元に、飛んできた。

灰色の塔が、ありました。そう、書かれていた。

少年は、からの荷を背負い、歩き出す。

昔、好きな人がいたんだ。名前は、忘れた。でも、また、好きになればいい。

紙をくわえた鳥たちが、空を舞う。

きっと、大人になっても、大好きだ。